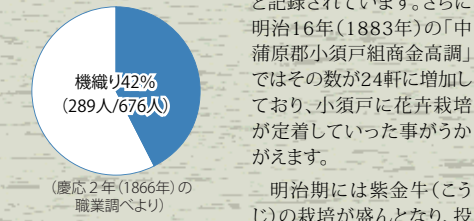


小須戸綿織業と花卉栽培

小須戸綿

小須戸は機織りが盛んな地域で、江戸時代には42%が機織りを行っていたと記録されています。その始まりは、享和元年(1801年)と言われています。



明治に入ると、産量は飛躍的に伸びていき、明治32年(1899年)には、町の機織関係者により、「小須戸物産組合」が結成されました。

小須戸の木綿織は、上質な点で評価を受け「小須戸綿」(下写真)として県内外に広まり、新潟県内では亀田に次ぐ産地となりました。

しかし、大正12年(1923年)の関東大震災を境に、生産は落ち込んでいき、大正期には200戸あった機業戸数も、昭和5年(1930年)には40戸程度に減少していきまし

現存している小須戸綿 (長井利夫氏蔵)

日本有数の花卉産地

小須戸は花卉の栽培も盛んです。その始まりは定かではありませんが、慶応2年(1866年)の小泉蒼軒の「両組産業開物之巻」には小須戸に4軒の植木屋があったと記録されています。さらに明治16年(1883年)の「中蒲原郡小須戸組商金高調」ではその数が24軒に増加しており、小須戸に花卉栽培が定着していった事がうかがえます。

明治期には紫金牛(こうじ)の栽培が盛んとなり、投機の対象となるほどで、その売買が制限されるほどでした。

現在でも小須戸は、花卉の有数の産地となっており、特にボケの栽培では、日本の約80%のシェアを誇っています。

在郷町小須戸へのアクセス



このマップについて
このマップは、多くの方に在郷町小須戸の町屋と町並みの素晴らしさと、それを裏付ける町の歴史を知っていただくために作成しました。

なお、小須戸の町屋は非公開となっております。裏の小道などを散策される場合は、住民の方にご迷惑にならないよう配慮をお願いいたします。町屋の内部の公開については、定期的に開催されるまち歩きにご参加ください。開催については、当会のHPにてお知らせ致します。

- 【参考文献】
小須戸町史／こすど風土記／明治から百年小須戸町の歩み／どすこいこすど／加藤健二「新潟県下越地方における歴史的建造物群の残存状況と建築特性～中蒲原・東蒲原郡を対象として」新潟大学大学院自然科学研究科修士論文／石川淳「小須戸町の町家における住空間構成住まい方」新潟大学工学部建設学科卒業論文
- 発行 小須戸町並み景観まちづくり研究会
- URL <http://kosudomachinami.blog.shinobi.jp/>
- 協力 小須戸まち育て支援協議会
小須戸小学校区コミュニティ協議会
小須戸にお住まいのみなさん

※ このマップは「小須戸まち育て支援事業」/公益信託 大成建設自然・歴史環境基金」の助成を受けています。

2009.03発行

信濃川舟運と小須戸

長岡藩の指定河岸

小須戸は信濃川の川湊としての役割も果たしてきました。信濃川では、長岡船道と呼ばれる舟運組織が長岡藩により組織され、小須戸は指定の河岸となり年貢米などの物資の集積地として発展しました。小泉蒼軒の「水経坤」によれば、安政5年(1858年)の小須戸には150俵積みの大船が三艘あったと記録されています。

蒸気船の就航

明治に入り、新潟県令楠本正隆が新潟町の有力商人に働きかけ、「新潟川汽船会社」を設立し、新潟～長岡間に蒸気船「魁丸」が就航しました。小須戸は、三条や板と並んで、着船地として指定を受けました。

新潟川汽船会社の盛況をみて、信濃川には多くの蒸気

船会社が設立されました。明治13年(1880年)には、小須戸の富豪、川村四衛や吉田一策も株主となって「新潟安全社」が設立され、当時最新鋭のエンジンを搭載した「安全丸」が就航し、信濃川舟運の主役となりました。明治19年(1886年)に、新潟安全社は小千谷の彙進社と合併し「安進社」となり、「安進丸」(下写真)が就航し、新潟～長岡間を朝・昼・夕の1日3往復していました。

信濃川舟運の衰退

明治31年(1898年)に北越鉄道(現在の信越本線)が全線開通し、自動車も普及し始めると、次第に舟運の役割は少なくなっていきました。さらに大正11年(1922年)の大河津分水路の完成で、河床が上がり航行に支障をきたすようになり、昭和の初めに姿を消しました。



(「小須戸町史」より転載)

大火後にできた古い町並み

町の約85%が焼失

小須戸では、町立て以来、幾度となく大火に見舞われてきました。最後の大火となったのが明治34年(1901年)6月1日に発生した大火です。

当時の新潟新聞の記事によると、火元は一ノ町(現在の大川前1丁目付近)で、焼失範囲は定かではありませんが、小須戸町の全791戸中670戸程(約85%)を焼失したといわれています。さらに町役場や警察分署、郵便局、小須戸貯蓄銀行などの公共施設も焼失してしまいました。

この日は、南西の強風が吹いており、火元が風上であったことや、当時の小須戸には消防組が組織されていなかったこと、そして消防活

動のできる男子が、隣町の新津の節句に出かけていたことなどが重なり、火災が拡大してしまつたと新聞で報じられています。

被害額は、33万7000円とされ、この額は、小須戸町の翌年の歳出額の44倍余りに相当しました。

大火の翌年の明治35年(1902年)に、消防組が組織され、さらに明治38年(1905年)にポンプ車が配備されました(下写真)。

今も残る大火後の町屋

この後小須戸では、たびたび火災はありましたが、町全体を焼失する大火は発生していないことから、現在残っている町屋は、最も古いものでこの明治34年の大火後に再建されたものであると考えられます。



(「新潟ふるさとの百年」より転載)

小路と水路網

張り巡らされた水路網

小須戸には、かつて水路網が存在していたことが文政9年の絵図から読み取ることが出来ます。

小須戸には、まず南北に伸びる水路が2つあり、さらにそれを繋ぐように東西方向に5つの水路がありました(裏面マップ参照)。これは明治27年(1894年)に作成された地籍図や明治34年(1901年)に作成された、測量図からも読み取ることが出来ます。

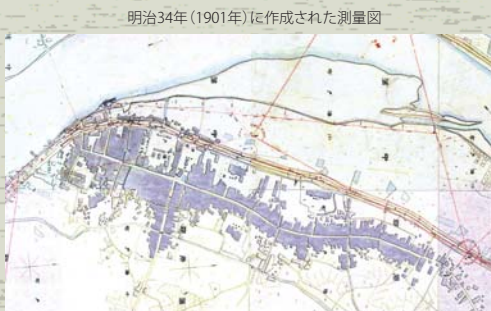
現在、一見すると水路は無くなったように見えますがお蔵小路や伴六殿小路をはじめ、水路があった場所には幅1m程の排水溝があり、これが当時の水路の名残ではないかと考えられます。

由来のある小路

一方その水路と同じように、小須戸の町の中には表の広い道から裏手に伸びる小路がいくつかあります。これらはそれぞれ形成された時期が異なります。

文政9年の絵図に描かれている小路は、住吉小路、お蔵小路、伴六殿小路だけです。それから約70年後の明治34年の測量図からは、上稲荷小路、下稲荷小路、上中野小路、分置小路が形成されているのがわかります。これらの小路の名称はそれぞれ由来があります(裏面マップ参照)。

このほかに吉野小路や小梅小路と呼ばれる小路があったとされる記録もあります。



(信濃川下流河川事務所HPより転載)

町割り(都市計画)

昔の町割りを読み取ることができる最も古い資料は、文政9年(1826年)に作成された「小須戸町屋鋪絵図面」です。これによれば、街道が信濃川に沿って、南北に約1km走っており、上流側は直線の街道となっていますが、下流側では緩やかに曲線を描いています。

町割り

最も上流側に庄屋の屋敷が置かれ、下流にむかって「上町」「中町」「下町」と呼ばれる町が形成されています。さらに、この南北の街道に対して、直角に街道(新保村道)が延びて「横町」が配置されています。

社寺は上町の東側に諏訪神社が、上町と中町の間に住吉神社と長海寺があり、さらに、中町の中心に了専寺と茂林寺が配置されています。

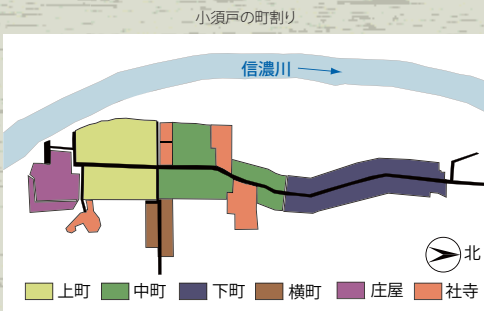
町の中心

「町屋の敷地の奥行き」に着目すると、上町や中町は非常に長くなっていますが、

それと比べて下町は短いことがわかります。この事と社寺の配置、道路の屈曲などを総合的に考えると、小須戸は、上町と中町を中心として構成され、一番上手に庄屋屋敷、町の中心に崇敬を集めた住吉神社、下手にお寺を配置した町割りであったと推測されます。

当時と現在の比較

庄屋の敷地が明治時代に解体され「新町」となり、住吉神社が諏訪神社に合祀されたほかは、街路の形状や敷地割りなどに、大きな変化はなく、昔からの都市構造が良く継承されている事がわかります。



(小須戸町屋鋪絵図面より作成)

在郷町小須戸の成り立ちと発展

小須戸は、越後平野の中央部、日本一の河川である信濃川の右岸の微高地に立地し、古くは近隣農村の経済の拠点地である在郷町として、また信濃川舟運の川湊として栄えた町です。

江戸時代

小須戸は新発田藩に属し、藩は領内を支配するため、村々をいくつかの「組」に編成しました。小須戸は当初、新津組に属していましたが、慶安2年(1649年)頃に新津組から分離し、23か村から構成される「小須戸組」が成立しました。このことからこの頃には、小須戸は周辺農村の中心地であったと考えられます。

町立ての時期

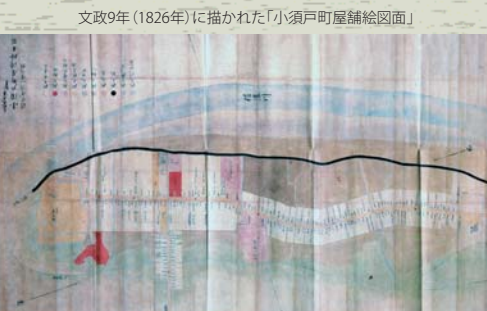
現在のところ定かではありませんが、六斎市が宝永年間(1704～1710年)に開かれたと言われており、少な

くともこの頃には、町として成っていたのではないかと推測されます。

町立て以降、周辺農村の生産力の向上と交通路の要地という理由から、町は次第に発展していきました。



※1…「町屋屋敷小帳帳」より
※2…「小須戸町屋鋪絵図面」より



(新潟市指定文化財・「小須戸町史」より転載)

8月24・25日 小須戸まつり

約350年の歴史と伝統がある祭りです。松・竹・桜・梅の4つの灯籠があります。2・5日の夕方には、灯籠土しが激しくぶつかり合います。



小須戸まつりの様子

10月下旬 産地大感謝祭

小須戸地域でとれた大根、白菜、シメジやブドウ、リンゴ、新米など農産物のほか、ニツト、花卉などが市価より安値で売られています。また地元野菜を使った「小須戸鍋」や小須戸産小豆たっぷりのぜんざい、ちまきや笹団子、コシヒカリおにぎりなどの売り場もあります。



産地大感謝祭の様子

12月 寒梅の里小須戸の寒梅まつり

小須戸は寒梅の生産では県内有数の産地です。寒梅まつりでは約20種類、5000鉢が展示即売されるほか、シクラメンやシンビジウム、千両・万両などの季節の花々が会場いっぱいになり並びます。また、12月7日～9日には、室内に飾る「瓢箪展示会」も同時開催されます。



寒梅まつりの様子

こだわりのお店

1 五泉屋菓子舗・吉田菓子舗 おか免

元祖小須戸銘菓、コシヒカリの玄米の粉を用いている珍しい落雁。天保年間(1830～1843年)に越中より菓子の製法が伝えられたと言われています。

2 木村冷菓店 きむらのふるさとアイス

夏季限定(梅雨明け～9月上旬)で販売されている、昭和初期の昔ながらのアイス。定番は、「あずき」のアイスで1つ300円。その他に、「白」と「クリーム」があります。

3 毛里多茶屋 えび餃子

名物のえび餃子は、エビが1尾まるごと包まれています。5個400円で全国各地に発送しており、ランチセット(700円)にも2個付いてきます。

4 加藤製パン店 あげあんぱん

町外からも常連客が買い求めにやってくる、知る人ぞ知る、人気の手作りパン。1番人気は「あげあんぱん」で1つ110円。お店は午前中のみ限定営業(日曜定休)です。

5 徳永豆腐店 厚揚げ

こちら町外からの常連客がいる人気の豆腐店。厚揚げや県内産の青大豆を100%使用した「緑豆腐」などが売れ筋です。

喧嘩灯籠と五番町神楽舞

喧嘩灯籠

小須戸の諏訪神社の祭りは、灯籠を激しくぶつけ合うことから、別名「喧嘩灯籠」や「喧嘩祭」と呼ばれています。その歴史は約400年前にさかのぼり、小須戸の富豪吉田家が京都に行った際、祇園祭の灯籠の美しさに魅かれ、寛永16年(1639年)に京都より灯籠を持ち帰り、諏訪神社に飾ったのが始まりといわれています。

当初は灯籠を押し合う程度でしたが、各町内が京都から人形師を招き、競って美しい人形を造って灯籠に飾り、それを自慢し合い、その果てに、各町内同士の喧嘩祭となつていったといわれています。

昔は近郷から、この喧嘩灯籠を一目見ようと、何万人と

いう大勢の人が集まり、通から屋根の上まで埋め尽す賑わいでした(下写真)。

観覧客の中には、自分方の灯籠の形勢が悪くなると、屋根の石を投げつける人もいたそうです。

また各町屋では、軒先に提灯を下げ、格子をはずして簾をかけ、屏風や人形を飾り、祭りを祝っていました。

五番町神楽舞

文化8年(1811年)頃、本望家三代目の衆太郎が町内の同志とともに、信州上田地方の神楽舞を持ち帰り、伝授したのが始まりといわれています。

神楽舞は、もとは奉納舞の本舞と、厄払舞の省略舞の2つからなっていましたが、現在伝承されているのは、厄払舞のみとなっています。



(「新潟ふるさとの百年」より転載)

舟運で栄えた在郷町
小須戸まちあるきマップ